Osaka University Knowledge Archive

Title	回顧・'60年前後デザインの風景
Author(s)	向井, 正也
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 72-86
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52759
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

研究報告

回顧・'60年前後—デザインの風景

向井正也

「デザイン理論」が今度で30号になるという。小冊子ながら，創刊号からつみあげてみたら20cmを超える厚さになった。よくぞ続いたものと感慨をおぼえる。本誌は，意匠学会の創立後3年，1962年の創刊で，10年前の20号の場合と同様，創立記念号からは3年おくれではあるが，何か記念の回顧でもとの編集からの注文である。これは30周年記念の27号で既にやっているのだが，多分に私的な偏りがあったと思うので，今度は，これまたすでに20号で少しのべさせてもらった，本学会の創立にからむお話を補足するカタチで，さらに東西両つのデザインの学会の動勢やら人間模様などに焦点をあててながめて見ることにしたい。

本学会は，当初「関西意匠学会」という名前で50年代もおわりの1959年11月に創立された。50年代といえば，わが国のデザイン運動にとって本格的な幕明けともいえる輝かしい時期だった。戦前のヨーロッパ経由の運動とは異り，戦後アメリカを経由して流れ込んだアメリカ・モダニズムの華麗な展開は，'52年発売のたばこ「ピース」のパッケージ・デザインで有名な，レイモンド・ローイの，「口紅から機関車まで」の書名そのまゝに全分野に互るデザイン・プラクティスの活性化はもとより，その教育や啓蒙等の上でもまた多角的に精

力的な活動を展開したのであった。

既に50年代のはじめから，クシの歯を引くように次々に創られたり，企てられたりしたデザイン関係の職能団体や学校，研究機関や展覧会やコンペ等は枚挙にいとまがない。こうした点については，本誌27号で中西徹氏がくわしく書いておられるので参照されたい。ただ，一つだけ補足させていただくなら，こうしたモダン・デザインの啓蒙的な運動の中で見落してならないものに近代美術館があることで，これはかって30年代のアメリカ・モダニズムの発展におけるニューヨークの近代美術館（MOMA）の役割を見ても明らかだが，50年代のわが国の場合にも，これと併行的な例として，この時期のはじめ（'52年）における東京国立近代美術館，の設立をあげることが出来よう。

'54年のW・グロピウスの来日にともなう，「グロピウスとバウハウス展」とか，'57年の「20世紀デザイン展」等すべて'50年のMOMAの「グッドデザイン展」の流をくむもので，この時期におけるわが国のモダン・デザインの発展の端初に於て重要な役割を果したものと見てよかろう。その後10年，'63年の同美術館京都分館の設置等に見られる関西における近代美術館の活動の立おくれはそのままデザイン運動の関西の後進性を示すものであろう。

このことはまた，デザインにおける「学会」活動にもあてはまるもので，それは本誌20号でのべた関西意匠学会の創立事情にも明らかであるが，そこでもとかく積極的な東の「学会」の姿勢が浮彫りされるのである。

東京で「デザイン学会」がつくられた事情は，こうした西の受け身の立場とは全くちがい。いわば時代の要望にこたえるていの積極性にみちたものだった。何よりも，それには数ある同志が集い，既に確乎とした活動の拠点も存在したのであって，特に後者については，何よりも戦前の東京高等工芸学校の延長として，西の京都高等工芸学校（現京都工芸繊維大学工芸学部）とともに東西を２分する国立のデザイン教育のメッカたる千葉大学工業意匠科（'51年設置）を見のがすわけには行かない。事実「デザイン学会」の委員長は初代（小池新

二）も第2代（山口正城）もすべてここから出ているのである。

千葉大にはこの他にも，知る人ぞ知る，塚田敢，福井晃一，山崎幸雄と多士済々，後の「デザイン学会」の主要メンバーとして活躍する人達がいた。後に京都美大が工業デザインの講師として迎えた松下電産の意匠部長真野善一氏も，もとを正せばこうした千葉大の教授陣のメーバーの一員だったのである。（'51年松下電産に製品意匠課をつくる際にスカウトされた。）私に「デザイン学会」へ入会するようすすめてくれたのも真野さんであった。入会に先立って私は，将来のデザイン教育の心準備にもと，当時松戸にあった千葉大を訪れた日のさわやかな印象を思い出す。小池先生は不在だったが，その他の人たちのすべてにお目にかゝれたのは幸だった。

そして，そんな事も手伝ってか，間もなく私はデザイン学会に入会することになる（'58）のだが，この頃すでに関西在住で，デザイン学会に入会していた人を，翌年の会員名簿から拾うと次のようである。秋田嘉正（松下電器），安藤広吉（成安女子大），伊東一信（京都学芸大），菊地礼（松下電器），重成基（京都学芸大），恒成一訓（写真家），長崎盛輝（京都美大），野口茂（京都工繊大），福島渡（大阪音響），福永俊吉（京都工繊大），真野善一（松下電器），その後の関西在住としては片山陽次郎（産工試）である。（敬称略）

これらの人々の大半は，その後間もなく創立された関西意匠学会のメンバーとして名を連ねることになるのだが，それに先立って，この中の一部のデザイン学会の会員たち（重成基，伊東一信，向井正也等）が関西にデザイン学会の支部をつくるべく奔走させられ，その事が結果的には関西意匠学会の設立へと導かれた事のいきさつは既に本誌20号でのべたが，その時には，この「東の学会」の支部づくりの準備会が一転「西の学会」設立の発起人会に変ったのを，もっぱら故井島勉先生の鶴の一声によるかのように書いたのだが，そうした事実があるにしても，その背後で東と西の両巨頭（勝見—井島）の話合いもまたあるにはあったようだ。「日本デザイン学会小史」20（以下小史と略記）によ

れば，1958年，山口正城に代って勝見勝がデザイン学会の第３代委員長になると，「関西地区の会員との関係を深め，また会員増をはかろうとの気運がおこった。」「なによりの証拠として，京都大会の計画と実施があった。勝見勝は，この間に東京から京都へ行き，“関西のボス”とうわさされていた京都大学の井島勉と，デザイン学会の関西支部などについて会談したが，不発に終り，物別れのようになってしまった。井島とすれば“支部”になることはがまんならなかったのであろうとうわさされた。皮肉なことに，これがきっかけとなって，関西のデザイン学会ともいうべき“関西意匠学会”が生まれ，京都大会の直前の1959年11月７日に創立したのだった」としるされている。

こうして出来た関西のデザイン学会としての意匠学会ではあったが，意匠学会30周年に際して元井能氏も本誌27号で「意匠学会は“デザイン”の学会である。それではデザイン学会とした方が適当でないかと思う人たちもあろう」と，こだわりを示されているように，筆者とて長年この，どうにもならぬ事を頭の隅に置いて来た。そもそも'50年代の，デザインブームの果てに生まれた学会であれば，本来その名は今日死語にも近い「意匠」ではなく，カタカナコトバの「デザイン」でなければなどと思うのも無理からぬことだろう。ゲンに当の「東の学会」にしたところで，その創立に当って学会の名称を投票によって決めたのだが，その時予め用意された候補の７つの名称の中から５つはすべて「デザイン」なる語を冠したもので，他の２つは「意匠」であったというが，結局「デザイン学会」なる名称が過半数の13票を得ている。「意匠学会」及び「意匠学研究会」はそれぞれ２票だったという。(小史１)

だが私は近年になって，やはり「意匠学会」という名称の方がよかったのではと思い直すようになって来ている。何も昨今のカタカナコトバ大流行の軽薄な波に乗っているからというのではなく，「デザイン」という語は，どうも「学」には馴染まないのではないかなどと考える。一体「デザイン学」とは何なのか？そんなものが成立し得るのか？そうした疑問は，かって委員長勝見勝

先生も考えあぐねた末未解決のままになっているようである。

本学会の創立期を回想するたびに，いつか何らかの形で記録に止めておきたいと思っていた事がある。それは本学会の初代の，しかも一回切りの「委員長」重成基先生のことである。本誌７号には巻頭に創立10周年を記念する井島会長の次のようなコトバが載っているが，この時重成さんは既に鬼籍の人であった。「……成安女子短大講堂で第１回大会が開かれた。参会した会員は200名ばかり，今は亡き重成基氏が委員長に選ばれ，私がまとめ役としての会長を仰せつかった。」

本誌は，会長の追悼文は載せるが物故会員については一行の記事も載せない。これは改めるべきだではないかと私考する。デザイン学会の機関誌「デザイン学研究」は年間の発行回数も段ちがいに多いこともあってか，これに連載の田中正明氏による前記「小史」には，時に応じて会員の消息やら，経歴等にまでもかなりのスペースを割いている。たまたま後述のデザイン学会の第６回大会（京都大会）において，当時会員でこの大会の開会の辞をのべた重成さんについて紹介しているので，そこから一部借用させていただくことにする。(小史20)

「重成基（しげなり・もとい，本名基太郎）1901年（明34）台湾の生まれ，1928年（昭３）京都高等工芸学校（現京都工繊大）図案科卒業後，大丸宣伝部に入社，課長，部長をつとめた後フリーとなり，東洋紡や大丸の仕事を中心にグラフィックデザインの仕事をするかたわら京都学芸大学（現京都教育大学）非常勤講師を経て，後教授として活躍，1967年（昭42）死去。

京高工時代，私の父の教え子の中でも逸材だっただけに，しばしば父の口からその名を聞かされてはいたが，はじめてお目にかゝったのは父の死後，意匠学会の集いに於てであった。いまだにその温顔が目に浮ぶ，畏敬してやまぬ忘れ難い人物の一人である。

まこと，意匠学会が発足したこの50年代の最後の年は，東西両「デザインの

学会」のからみ合いの上で記念すべき年だった。この年，東の「学会」は，第5回，第6回と，異例の2度にわたる大会を開催している。第5回は1月の東京（法政大学）で，この時私は，新入会員として，はじめでおわりの研究発表を行っている。(本誌27号，P.22) そして今一つの第6回が問題の，これまた後にも先にも一回きりの「京都大会」だったので，これは前記11月7日の意匠学会の発足のあとを追うかのように，同月の28日京都大学に於て開催されている。

「“デザイン学会第6回大会”表題の大会が，京都大学・楽友会館において行われた。同大会が東京以外の地で開かれたのは今回が初めてで，期待されるところが大きかった。大会は研究発表とシンポジュムの部門に分れて熱心な発表や討論が行われた。…」(小史19)

地元の京都としても，かなり好意的に受入れられ，会員以外でも関係方面からも積極的な参加を得，大会を成功に導くことが出来たのは幸であった。この点特に，半数を超える地元参加のシンポジゥムが東西交流の場となって，大会のムードを盛り上げるのに効果があったと思ふ。テーマは「クラフト・デザインの現代的意義」で，パネリストは，河本敦夫（京都工繊大），小池岩太郎（東京芸大），八木一夫（陶芸作家），服部茂夫（産業工試）で，司会は竜村織物の竜村謙（文化財保委）という錚錚たる顔ブレであった。

この大会の受入準備は，「小史」には「地元在住の会員で組織された実行委員会による」とされているが，その実態は，京都学芸大学を中心とする，教授の重成基氏や助教授の伊東一信氏に私が加わった程度のものでしかなく，大会の翌日の見学会で案内役をつとめたのもこうした少数のメンバーであった。見学先は竜村織物，藤平窯業，清水六兵衛工房等となっているが，手わけして案内したせいか，私が覚えているのは竜村織物と向日市の河合工房だけである。竜村邸の庭で御主人の謙氏が鯉をよびよせて餌をやるシーンが思い出される。同行したのは千葉大の塚田敢氏（色彩学）だったが，竜村さんも塚田さんも既

に故人だし，パネリストにしても，現在存命は小池岩太郎氏ただ一人と，今更ながら30年という時の流れを痛感させられる。

意匠学会の発足直後に東の「学会」が，はじめて京都で，この年２回目の大会を催したということの背後には，なおも執ような，デザイン学会の「関西支部の設置」に対する布石の意図がこめられていたといわれる。(小史20) それはおそらく，この前年（'58）に委員長になったばかりの勝見勝氏のいわば政治的な配慮によるものと見てよかろう。それは全く一つの執念であったかのようで，おどろいたことに，「小史」21によれば，デザイン学会の記録の中に，「京都大会を契機として」「1960，７，17関西支部設道」とあり，「会則では第16条に“地方に支部を道く事が出来る”となっているが，デザイン学会としては初めての支部設置であった。」として関西支部委員として，重成基，向井正也，福永俊吉，松上茂，伊東一信と名を連らねた上，「このうち重成基と向井正也は既に委員となっていたので支部委員と兼任となった。」などとのべ，関西支部の事務所として京都学芸大学構成科内をあげている。

何ともまた寝耳に水のお話である。私はこんな事が，たとえ形だけにしろ，デザイン学会の議事録に載っていることを，30年後の今日はじめて知っておどろいた。そもそもこんな決定が，デザイン学会の本部で下されたという事実を，本部と支部の委員を兼ねる私たちに何一つ知らされていないのも不可解である。おそらく重成先生もご存じないままあの世に旅立たれたことと思う。

つまり「日本デザイン学会関西支部」なるものは，帳面づらだけで，実際には存在しなかったわけである。「小史22」には，こうした事実が次のような言葉で裏書きされている。「関西支部は設置されたけれども，実際には名目だけで，実質的な活動はほとんど何もされなかった。そしてその後なしくずし的に解消されてしまった。それは関西意匠学会との関係が無縁ではないだろう。」

日付のほどは定かではないが，私がデザイン学会から退会したのもこの「支部解消」の頃で，そのやり方もまた「なしくずし的」なものだったと思う。前

記重成さんと私とがデザイン学会委員に新任となっているのは'60年・'61年度の役員改選の時なのだが，次の'62年度・'63年度でも二人とも留任となっている。ただこの時，デザイン学会は，「委員長」，「委員」なる創立以来の役員の名称を，「理事長」，「理事」と改めることになったので，二人とも理事にさせられているのだが，おそらくこの「理事」の任期切れの時あたりが，「デザイン学会関西支部」の自然消滅と時期的に重なるものと見てよかろう。この名目だけの「関西支部」設置という，強引なやり方に，委員長（理事長）勝見勝の人柄の一端がうかがえるように思われる。それはこの世界ではめづらしく政治的手腕に長けた彼のマイナスの面であるとともに，一面わが国デザインの啓蒙運動の上で大きな成果を生む源でもあったのではないか。先頃私は，京阪百貨店（守口市）での田中一光のポスター展で，「勝見勝賞設立準備委員会」主催の「追悼勝見勝展」（'84-7）なる珍らしいポスターに今更ながら彼の業績を思った。その内容は「国内外の97名の画家，デザイナー，イラストレーターたちによる作品展示」なのであった。

勝見勝は'58年デザイン学会の役員改選により第3代委員長に就任したが，詳細は知らず，'83年のその死に近い頃まで，約4半世紀に亘って，トップの座にあった（呼称も前記委員長から理事長に，さらに会長へと変っている。）という事実もまた，業績の大きさを示す指標とも思われるが，何よりもこの任期の点で前2代の委員長と大きくかけ離れており，（初代の小池新二の任期が〔'53年—'56年〕，第二代の山口正城が〔'56年—'58年〕ときわめて短いが，これは役員改選のたび毎に身を引いたためと思われる）このため勝見は，後になって，「3代目とは思われずに，最初から会長であったかのように言われたり，書かれたりされるくらいである。」（小史16）

事実，デザイン学会の創立のはじめから常任委員として会長をもしのぐ実質的なリーダーの1人だった勝見は，やがて'60年代及び'70年代の経済の高等成長による日本の黄金時代を背景とする，デザインの世界における一種のボス的

存在として羽ばたくことになる。'50年代のはじめ頃から「デザイン評論」という新分野を開拓して行った彼は，グラフィック・デザインを手はじめに，やがてデザインの全分野に亙って巾広い活動を展開する。'50年，毎日産業デザイン賞審査員，('76年まで)，'51年，産業工芸試験所「工芸ニュース」編集顧問，'52年，「日宣美」評議員（'69年まで)，東京アートディレクターズクラブ顧問（'83年まで)，日本インダストリアル・デザイナー協会顧問（'83年まで)'53年デザイン学会常任委員，国際デザインコミッティー会員，'55年造形教育センター顧問，'57年，通産省意匠奨励審議会委員，東京教育大学講師（意匠論)，東京大学講師（工業意匠)，といった風で，'58年に49歳でデザイン学会の委員長になるまで，この世界での地盤固めは十分に出来ていたと思われる。

それだけに，委員長に就任後の，彼のさまざまな面での腕のふるいようにはめざましいものがあった。おくそくの域を出ないが，このことは「学会」関係において同様で，かなり思い切ったワンマンぶりだったのではないか。そうした勝見天皇の力をもってしても，あの「デザインの東西両学会」の一本化，だけはどうにも思うにまかせぬ事柄だったようで，挫折後もなおあきらめ切れぬこの悲願への執心の程は，前記一連の悪あがき的な措置にあきらかである。

なおこの辺で，勝見氏との対比の上で取上げておきたいことがある。第２代委員長山口正城氏のことである。初代の小池新二氏同様，当時千葉大工学部工業意匠科の教授で，同校の前身，東京高等工芸学校図案科の出で，卒業後直ちに大阪市工芸学校（現市立工芸高校）図案科に入り，後年京都市立第二工業学校に転ずるが，戦前既に二十年近くにもわたって優れた人材を育て上げたデザイン教育のベテランであるとともに，一方自由美術家協会の会友として，「限りなく純粋な抽象絵画の夢を追った画家であり，また造形理論の研究者でもあった。」(小史13)

人間的にも，勝見の「陰」に対する「陽」で，あけっぴろげの磊落な性格であり，また初代と３代がともに東大の文学部の美学美術史学科出身の学究だっ

たのに対して，いわゆる「蔵前（クラマエ）」出身の芸術家であり，また前２者がともに比較的長寿を保ち，この世界で輝かしい経歴をつみ重ねて行った（小池新二は後に九州芸工大の初代学長に就任している）のにくらべて，いよいよこれからが本番というところで，'60年代を目前に，56歳での突然の死はあまりにも惜しかった。もう少し長く生きていてほしかったとまことに遺憾である。私はデザイン学会の第５回大会（'59年１月）で研究発表を行ったが，そのあとの懇親会ではじめて彼の人柄に親しく接することが出来た。その時「このような人をもっと早く知っていたら」と残念に思ったものだが，この思いはやがて，より深い失望にとって代られたのである。かくて，この1959年という年は，私のデザイン・ウォッチングの歴史の中で，終生忘れ得ぬ年とはなった。山口さんの死は12月だったが，同じ年の２月，私は，今一人，この道の先達としての父を失っている。(本誌27号，P.21)

明けて1960年は，デザインイヤー，東京で空前絶後の「世界デザイン会議」(WoDeCo）が開催された年である。それは日本のデザイン運動にとって「栄光の50年代」をしめくくるにふさわしい，大げさにいうなら，国家的行事の観すらあった。その運営委員会には財界の巨頭たちが委員として名を連らね，開会式では，前記「口紅から機関車まで」の翻訳者で，当時外務大臣だった藤山愛一郎氏が祝辞をのべている。「……この会議は，われわれの生活環境に対する芸術的意欲と工業生産技術とを総合して，デザインのすべての分野において，今日第一線で活躍している専門家諸氏の集いとして，極めてユニークなものであります。」「この会議は共通の言葉である〈デザイン〉を通じて，諸国民の間に，より強固な相互信頼と相互寄与の礎をきずくばかりでなく，来るべき時代の人類の進歩に輝かしき指針を与えるものと確信しております。」

全世界から300名にも及ぶデザイナー達がやってくるこの世紀のイベントに当って，わが国のデザイン界は，その各部門から，よりすぐった人達による実行委員会を組織したが，デザイン学会も，委員の中の有力メンバーをその中に

送り込んでいる。常任委員としての勝見勝，小池岩太郎，河合正一，塚田敢の4名である。これらの人々はこのイベントの運営上での裏方や名目だけに止らず，事実上会議の進行の上で，重要なポストを占めていた。

会議は初日の開会式の後3日間（3サイクル）に互り，各サイクルは午前中を総会セミナーに，午后を分科会（パネルディスカッション）に当てているが，勝見はサイクル2セミナー（テーマ：実際性）の議長，河合はサイクル3セミナー（テーマ：可能性）の副議長，小池はサイクル3の「夜のセミナー」（テーマ：デザイン教育）の議長，塚田はこの「夜のセミナー」の講師の役割をそれぞれつとめている。ちなみにサイクル1セミナー（テーマ：個性）の議長はハーバート・バイヤー，サイクル3セミナー（テーマ：可能性）の議長はトーマス・マルドナードであった。

閉会式で，議長は夫々のセミナーの「まとめ」をやったが，勝見も「実際性」についての討議のまとめとして，すべての発言から共通していえることは，デザインの各専門分野が，夫々独自の方向で「遠近法的拡大化」の傾向があり，それらの「対決」が，将来の「デザインの総合」の上でネックとなると思われるが，その調和・融合の手段や方法はこのセミナーでは十分解決されなかったにしても，そうした問題の存在が確認されたことは大きな収獲だったとのべている。

このように勝見は，デザインの各専門分野の相互連けいや総合といった問題に不断に強い関心をもっていたようで，そのことはWoDeCo後，同じ年の10月に発行されたデザイン学会の論文集「デザイン学研究」第2号における「デザイン学への期待」なる一文にもうかがうことが出来る。ここで彼は，WoDeCoを契機としてデザイン各分野の交流と提携という意識がめざめて来たが，これまで日本のデザイン運動は，量的なひろがりのみを追求して，質的な面での研究は不毛だったが，今やこの点についてデザイン学会の責任が重大になってきたとして，今後は「デザイン諸分野の交流と提携と綜合のための学

問的な基礎づけ」として彼のいう「比較デザイン学」といった方向を推進して行きたい旨のべている。(小史24)

「デザイン学研究」第1号は，第2号より4年も前（'56年11月）に発行されたのだが，その巻頭の山口委員長の「発刊に際して」を読むと，彼と勝見との「デザイン学」の概念をめぐる見解の違いが分かって興味ぶかい。

「デザイン」なるものを，いわゆるデザインブームにおけるデザインなどと峻別して，単に産業だけではなく，「現代人の生活の中に，あらゆる部面に浸透しつゝあるもの」と考える山口は，「デザイン活動は，もっと人目につかない領域でも着実に行われているもので，そこでデザイナーは最も重要な存在であることはもとよりだが，デザイナーのみがデザイン界の住民でないことを自覚すべきである」との考え方に立って，彼のいう「デザイン学」を「知的愛」というコトバで説明している。「デザインについての科学的研究，或は知的考察が必要か否か，デザインの「学」が成り立つか否かというような問題は未解決であるが，本学会の会員は，そのような疑問にしりごみすることなく，むしろやむにやまれぬ知的愛に駆られて，それぞれのテーマに取り組んでいるに相違ない。そういう知的愛がなかったら本学会は生まれなかったであろうし，また成長もしなかったであろう。」そして，この創刊の学会誌の名に言及し，「デザイン学研究」なる名称に「いささかおもはゆい感じがするが，本学会の新しい仕事の指標としてふさわしいと信ずる」とのべている。(小史14) 今にしてなお，同調したい内容を含む奥深い考え方が示されていると思う。

だがデザイン学会は，こうした山口委員長の思いとは別の方向に発展して行ったようだ。次の委員長勝見は，山口さんとはむしろウラハラに，デザインにおける「学」なる呼称の昭れくささなどなんのその，むしろ「学」そのものへのアプローチに執心したかの観が強い。

1963年に入って，この学会は「デザイン学会報」なる年刊の小冊子を創刊したが，その巻頭で，理事長勝見勝は，「創立十年にあたって」を題して，はじ

めに「惜しい人物」山口委員長の死を悼み，「日本のデザイン運動にとっての大きな痛手」としながらも，ひきつづいて，その終生に亙る「デザイン学研究」の前途に対する希望と抱負について言及し，「まだデザイン学の決定的な方法論が見いだされたわけでもなく」また「一部の会員のなかにはデザイン学など成立する見込みが明らかでない，などの意見もあるようだが」「欧米にデザイン学が成立していないにせよ，それが成立しないという証明がなされないかぎり，われわれはそれをあきらめてしまうのはおかしい」とのべ，現に欧米の著作の中にも「デザイン学成立の可能性を暗示し予言する思索のあと」が多くあるとして，エルゴノミックスや人間工学の発達，新しいモデュールの思考実験，視覚言語とセマンティクスの体系化等をあげているのには問題が残るように思われる。

“WoDeCo 1960”のような企ては，こうした思考に導かれて「学会」の発展をはかろうとする委員長勝見にとって，正に渡りに舟の快挙であったろう。「学会」が双手をあげてこれに参加，積極的に協力したのも当然である。だがオモテ向きはともかく，その内情は必ずしも満足のゆくものではなかった。何より問題は，デザインの綜合，体系化がうたい文句のこの会議への各部門の参加の足並みがそろわなかったことである。

実行委員会の顔ブレや会議の進行などを全体的に見ても，その主導権を握っていると見えたのは何よりも建築とグラフィック・デザインであり，インダストリアル・デザインに至っては個人的な参加はともかく，団体（日本インダストリアル・デザイナー協会）としての参加を辞退するという消極的な立場にとゞまった。何でもデザインの国際会議など，開催するには時機尚早だとの理由によるものとか。わが関西意匠学会にしても，発足後わずかに半年ということもあってか，団体としては参加しないままに終っている。

そうしたなかで私は，当時未だに形だけにしろデザイン学会の理事ということから，あえて個人として，この会議に参加し，その時の報告のようなものを

「デザイン理論」の創刊号に発表している。(“ジャパン・デザインの反省”)

ところで，個人参加だが，だれでも自由に参加出来るものではなかった。新聞によると，会議の前日までに，世界各国から東京に集まった人たちの数は241人になったが，この人たちを全部正式に会議参加者にするわけには行かず，総会出席者はその約半数になったという。事の次第は国内についても同様で，参加の登録をした人は千数百人に上ったといわれ，この中で会議の正式メンバーとして認められたのはわずか150人だったとのことである。

「世界デザイン会議議事録」の巻末にある日本参加者名簿には156人の名が載っているが，そのほとんどは東京圏に属するもので，関西からはせいぜい全数の十分の一程度でしかない。それもほとんどは何らかのデザイン団体をバックにするもので，純粋な個人参加は寥々たるものだったようである。意匠学会所属の人達の名がほとんど認められていないのもその為だったろう。

そうした数少い関西の参加者の中では珍らしく，新人としてグラフィック系では，ともに京美大出身の田中一光，柳原良平，ID系では多田愛美の名が見られる。既に美大の図案科で接触のあった多田君とは当時会場で顔を合わせていたが，勝見氏が議長の，サイクル2のセミナーで，活発な質議応答をやっていたのを思い出す。その彼と今年7月の神戸例会で久しぶりで再会した時，彼は新設の神戸芸術工科大学の教授になっていた。小池新二氏が九州で創設した「東の学会」系の大学に連らなるものだけに，今さらながら東と西のデザイン界のデザイン界の「交流」を思った。

なお「交流」といえば，やはりWoDeCoに参加された日野永一委員などもおそらくこの頃，既にデザイン学会に入会されていたと見られ，その第10回大会には東京都立工芸高校在籍で研究発表されているし，('63年11月)，副会長高井一郎氏などもこの頃，守口市の三洋電機意匠部在籍で，デザイン学会に入会されている。('63年8月)「西」の重成委員長が珍らしく，デザイン諸部門の連けいの必要を説き，「デザイン理論」がそうした問題に役立つことを念願

するといわれたのもこの頃のことであった。(「デザイン理論」2)

1960年のあとさきは，'50年代から'60年代へとデザイン的にも，一つの時代の転換のはじめに当っていた。当時のデザインの状況を今日のポストモダン状況から見ると文字通り隔世の感がある。

WoDeCoを支配したデザイン精神は，'30年代のはじめヨーロッパからアメリカにうつされて，アメリカ化されながらもなお基本精神を保っていたモダニズムのそれだった。その典型例としては，あの「グッド・デザイン」運動で知られた「カウフマン国際デザイン賞」の創始者，エドカー・カウフマン・ジュニア，'61年にこの賞をうけたあのバウハウスの象徴的存在，ウォルター・グロピウス，そして巨匠ミース・ファン・デル・ローエなどの思想や活動があげられよう。この精神は，戦後文化的にアメリカ一辺到だった日本のデザイン界を支配したことは勿論，その後のデザイン状況の変化にも抗するかのように，この精神を至上と見なす傾向は'60年代を通じてなかなか衰えを見せなかったといえる。勝見氏などもその代表例の一つだが，かくいう私なども，未ばに思想的にモダニズムから自由ではありえない。

これはやはり世代的なもので，私はいわば「モダニズム世代」に属する人間なのかも知れない。WoDeCo以来30年の時の流れはこうした「モダニズム世代」の多くを消し去った。「東」の勝見会長も「西」の重成委員長も，その他多くの老兵たちが消えて行ってしまった。同じことが身近なところでも起っている。意匠学会30周年で本誌27号に一しよに記念の文章を書いた元井さんも野口さんも，既に故人になられたし，今井委員や金田会長も逝ってしまわれた。この回顧談を終えるに当って御冥福を祈るのみである。

(むかい・まさや)